

紀

要

第 12 号

1999. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# シルクロードの遺跡から

—歴史学を考えるためのヒント vol.1—

細川修平

今年の夏、中央アジア・ウズベキスタンを中心とする遺跡を見て回った。ウズベキスタン共和国は、旧ソビエト連邦から分離・独立した新しい国家であり、現在急ピッチで、国家の諸基盤の整備が進められている。文化財・歴史学もこうした国家基盤の一翼を担っており、整備・構築があわただしいスピードで進められている。

こうした状況の遺跡の見学は、「シルクロードのロマン」以上に、文化財あるいは歴史学の現在の在り方、あるいはそれを取り囲む現代社会全体の課題点を考えさせるものであった。以下は、中央アジアの遺跡を見学しつつ考えた文化財・歴史学を取り囲む諸問題のメモである。中央アジアの歴史・遺跡に十分な知識を持たない筆者の責により、事実誤認や誤解が存在すると思われるが、歴史・文化財に対して思考するためのヒントの羅列として読んでいただければ幸いである。

## アミール・チムールの復権

ウズベキスタンにおける「歴史見直し運動<sup>(1)</sup>」の大きな柱となっているのが、アミール・チムールの復権である。言うまでもなく、中世巨大帝国の一つ「チムール帝国」の首都が、サマルカンドに置かれた事実に起因する。ソビエト時代には「残忍な征服者・破壊者」として扱われていたチムールが、「勇猛で聡明な国家指導者」として、国家・国民の英雄として評価されている。かつてのレーニン広場はチムール広場に名を替え、レーニン像はチムール像に取って代わっている。「kuch adolatta」というチムールの言葉は町中にあふれ、結婚の誓い・報告を「チムール像」の前で行うと言う行為が行われている。もちろんその過程においては、チムールはウズベクと呼ばれた「部族集団」ではなく、むしろウズベクと呼ばれた人々はチムールに侵略され、また、その帝国を滅亡へと導いたと言う事実は顧みられることはない。単純にチムールはウズベク人の統合の

シンボルとして、まさに国民国家ウズベキスタンのイデオロギイ的中心となっているのである。

こうした事実・現象を具体的事象において支えているのが、チムール時代の遺跡の大々的な整備・改修である。サマルカンドのレジスタン広場やグル・エミール廟などに代表されるチムールおよびその帝国に関係する遺跡群は、多くが長いまでの姿に整備され、チムール時代の繁栄を可視的歴史として今日に伝えている。これらは観光名所としては言うまでもなく、一般市民の憩いの場として、あるいは、まだまだ低層な都市空間においては文字どおり「街のシンボル」として、紺碧のドームを四方に輝かせている。結婚式にレジスタン広場に赴くと言う行為が行われていることからすれば、目に見る街のシンボルは精神的な支柱（＝国家イデオロギイ）にもなりつつあると言えるのである。

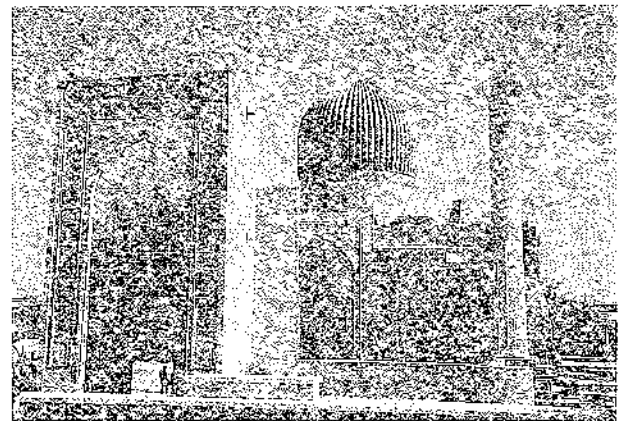


図1 整備の完成したグル・エミール廟

これら遺跡の整備は、旧ソビエト時代に開始されたものも少なくはないが、1991年の独立後、1996年に実施されたチムール生誕660年祭の開催に合わせんがため急ピッチで進められたものが大半である。海外からの賓客を招いての祭典の実施と、これら遺跡の整備・復元はまさに英雄チムールを人々に印象付けるための重要な国策であった。他を圧倒する視覚的効果と、そこを舞台とする大々的なイベントの実施、「共産主義＝レーニン主義」を国是としてい

た中から、突然に世界史の中に出現した国民国家ウズベキスタン共和国のイデオロギー的支柱として、「アミール・チムール」は、「マルクス・レーニン」に替る地位を獲得した。一般に国民国家ウズベキスタンの基盤と理解されている「民族＝ウズベク人」の概念ですら、旧ソビエト時代の中央アジア民族政策を基礎としている<sup>121</sup>。チムールの遺跡は、国民国家のシンボルとして意義付けられたのである。

文化財が整備され市民に親しまれること、多くの観光客を集めること、これらは通常、好ましい姿として理解される。あるいは地域の歴史を掘り起こし、その歴史を顕彰すると言い換えてもいいだろう。しかし、明らかに国策として、一定の国家イデオロギー形成のために整備された遺跡群を目にしたとき、果たして無批判なこの方向性が妥当性を持ち得るのか、もう一度、歴史・文化財の原点に立ち戻ってみるものの必要性を痛感した。この原点を顧みること無く整備され、しかもその背景には国民国家のイデオロギー的政策が存在するとすれば、そこに得体の知れない不気味さを感じたと言い換えてもいいだろう。「歴史・文化財は地域に存在し、地域の中で評価される。」今まで多く語られてきた言葉である。しかしそれが、結果として地域を縛るものになったとき、すなわち強烈な地域イデオロギーを形成したとすれば、その方向性の如何にもかわらず、それは歴史の本質的目的である「関連した多様性の確認」とは程遠いものと言えるのではないだろうか。文化財・遺跡は目で見て体感する歴史である。それがゆえに、その整備・活用の持つ責任の大きさと、一つ間違った時の恐ろしさが感じられるのである。

### 荒涼たるベンジケント

ウズベキスタンに向かうアジアナ航空では、スタッフや画板を持った集団と同乗した。聞くとは無しに耳にした彼らの会話からすれば、フェルガナでの発掘隊のグループであるらしい。世界の考古学をリードする日本の発掘技術は、再び中央アジアの遺跡をターゲットに組み入れたのである。

ところで、今回の旅行での楽しみの一つがタジキスタンに所在するベンジケント遺跡の見学であった。中央アジアからガンダーラ・インドへのルートに位

置するオアシスの遺跡であり、イスラム化する以前、ソグド人の貴重な遺跡の一つとされている。旧ソビエト時代から今日まで継続的に発掘調査が実施され、初期仏教的色彩を帯びたフレスコ壁画をはじめとする、貴重な発見が相次いでいる。遺跡は、現在の市街地を見下ろす丘陵の上に広がり、ザラフシャン川の流れとトルキスタン山脈を望む景勝の地である。荒涼とした丘陵とともに、悠久の歴史への心を揺さぶる風景である。しかし、遺跡の現状をみれば、広大な遺跡全体が、掘り散らかされたトレンチの残骸であると言うのが真実である。確かによく見れば、トレンチらしき窪みの中には建物遺構が残され、当時の都市構造や生活空間をトレースすることも不可能ではない。しかし、その大部分が激しい風化を受け、自然崩壊や人為的な破壊を含めて、ほとんど本来の姿をとどめてはいないのである。一見、ソグド人達の不幸な歴史を現しているかにも見える荒涼たる遺跡の景観は、実は、ここ数十年の発掘調査が生み出したものだった。そうした一角、最も風化していないトレンチが現在の発掘調査区で、見学時にも発掘作業が進められていた。



図2 ベンジケント遺跡の風景

ベンジケントよりさらに過酷な環境のためか、発掘調査が遺構破壊にと同値である事実を見せつけているのがアフラシャブである。チンギス汗による徹底的な破壊を受けた古代都市サマルカンドの遺跡で、東西交流の貴重な遺構・遺物が多く発掘されている。しかし、ベンジケントより乾燥が激しいためか、現状はより荒涼としたトレンチの残骸が広がり、よく見れば、土器などの破片と人骨が散乱している。まさにチンギス汗による破壊の激しさをイメージさせ

る景観であると言えば皮肉であろうか。

これらの遺跡の名誉のために付け加えておきたいが、遺跡の近接地には博物館が営まれ、主要な出土品の幾つか、特に有名な壁画を現地で見学することが可能である。また、説明版などもそれなりに整備されており、ペンジケントとアフラシャブと言う古代中央アジアを代表する遺跡を見たいと言う欲求は、一定レベルでは達成できる。そして、一般の旅行者には荒涼たる遺跡の景観はそれなりに、古代のロマンを掻き立てるようである。

さて、ペンジケントとアフラシャブ、この二つの遺跡の継続的な発掘調査がもたらした多大な成果は、中央アジア史のみならず、まさに世界史レベルでの文明交流の実態を示す、人類にとって貴重な足跡であり、その学問的意義を否定することはできない。そして、それが発掘調査と言う方法論による限り、一定レベルでの遺跡の破壊を伴うものである宿命も理解できる。しかし、「掘りっぱなし」とすら感じられる遺跡の現状は、果たして、遺跡としての価値を十分に活用しているかと言えば、それは疑問とせざるを得ない。ある程度の遺構の保護策などは考えられてはいたであろうが、結果として遺構は痛ましい姿に破壊され、そこに立って古代オアシス都市の実感を体感することは、もはや不可能なのである。これは遺跡として大いなる損失である。日本の大部分の場合とは異なり、3次元の遺構が重複する遺跡において、発掘調査と保存・公開とを両立させることの難しさ、想像を絶する厳しい自然環境条件など、荒涼たる遺跡の景観を生み出した背景は理解できる。しかし、それが全てではないはずである。

遺跡は発掘調査によって如何に優れた成果が得られるかではなく、あらゆる人たちがその場において体感できることこそが一義的な意味であると考えている。この意義は、発掘調査によっても損なわれることがあってはならない。発掘調査を実施する者にとっては、検出された遺構・遺物をどのように保護・活用するかと言う問題が、検出された遺構・遺物をどのように研究し、歴史的に評価を与えるかの問題と同等以上に問われるべきである。ここまでを一体として評価されたとき、初めて考古学が社会的意義を有すると考えている。これは、単純に用語や図

面を簡単にすると言った現象ではない、真の意味での学問の社会への還元と言えるだろう。

私たちの日常では、発掘調査は破壊を前提としたものが圧倒多数である。従って、発掘調査は、その検出した遺構をどのように保護・活用するかまでが一連の作業であると言う基本的問題を忘れ去っているのではと言う反省がある。多くの人々が遺跡から歴史を体感すること、これは、単純な学問の還元ではない。多くの体感こそが「連関する多様性」を形成するための第1歩であり、これはとりもなおさず歴史の本質へ迫る課題である。ペンジケントの荒涼とした風景からは、歴史の儚さは体感できても、活気にあふれたオアシス都市のイメージを体感することはできなかったのである。

#### ブハラの街角から

ブハラは、シルクロードの拠点の一つである。カラハン朝およびブハラ汗国の首都として、1902年の滅亡まで栄えた古都である。ソビエト時代には、中央アジア唯一のメドレセを維持した、イスラーム宗教都市でもある。現在はウズベキスタンの中堅都市として、開発が急ピッチで進行している。同時に、ブハラ汗国の古城（アルク）や、町のシンボルであるカリヤン・ミナレットなど歴史的な建造物の大半が、世界遺産として登録・保護されている。

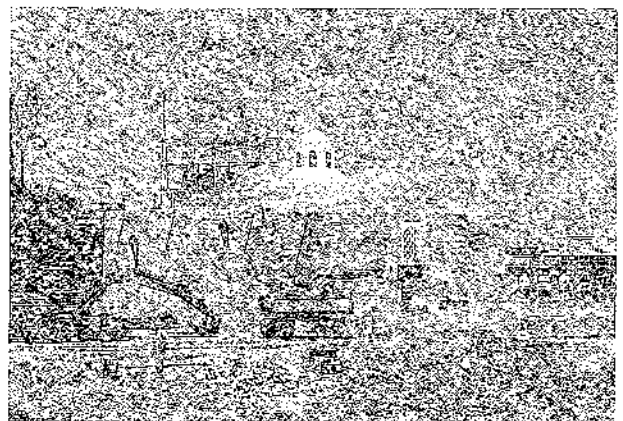


図3 整備工事中のチャシャマ・アユブ廟

このブハラで最も古い建造物は、チンギス・ハーンの蹂躪から奇跡的に免れたイスマイル・サマニ廟である。初期中央アジアのイスラーム建築であり、西方仏教思想などと融合した貴重な建造物とされる。この建物の基礎は、現地表下約1.5m程度の深さに

位置している。砂漠地帯と言う堆積と風化の激しい地域であり一概には断言できない面も存在するが、9世紀の建造の頃から、砂嵐や整地などによって、1.5m以上の堆積層が形成された可能性を示している。サマニ廟の隣接地に大きな穴（ごみ穴？）が掘られており、その壁面には素人目にも3～4面の遺構面が形成されている状況が見られた。すなわち、この付近には、9世紀以降1.5m以上の堆積層が形成され、その中に3～4面の遺構面が包含されているのではと観察できたのである。

サマニ廟のすぐ近くには、旧約聖書の預言者ヨブの伝説を持つチャシャマ・アユブ廟が存在する。チングス・ハーン以降に順次増築され、各時代の建築様式が重なり合った歴史的建造物であり、見学時には修復作業と周辺環境整備工事が行われていた。修復作業は、焼成煉瓦と漆喰を基本とした工事で、煉瓦建築物の復元の様子が観察できた。一方、周辺環境整備は、ほとんど発掘調査が成されることの無いまま、すなわち、本来の遺構の有無などは問題とされることなく進められていた。筆者の観察によっても、破壊された遺構を少なからず指摘することが可能であった。先ほどの大きなゴミ穴も然りである。サマニ廟から続く9世紀以前の遺構面、すなわち、古代・中世におけるオアシス都市ブハラの状態の解明などは問題とされていないのである。

この現状は、ブハラの市街地のみならず、サマルカンドなどの他のオアシス都市でも該当する。市街地の開発が活発に行われていたが、事前の発掘調査は全く行われていないのが現状のようである。チムール関係の遺跡の復元・整備が極めて大規模に行われている現実と大きな格差が指摘できる。さすがに、世界文化遺産に登録されているヒワのインチャン・カラの中心タシ・ハウリ宮殿の整備復元工事では、トレンチが設定され、層位的な発掘調査が実施された痕跡が見て取れたし、修復は、調査で検出された基礎を踏襲した形で進められていた。

今、こうしたウズベキスタンの現状を非難するものではない。むしろ、独立後10年、決して経済的・政治的に決して安定した状況でない中、世界遺産にも積極的に登録し、国民国家のイデオロギー形成の国策の一環とは言え、チムール関係の歴史的建造物

の修復を急ピッチで推し進め、また、博物館施設なども充実させているウズベキスタン政府の文化政策には、予想外のものを感じたし、素直に敬意を払うべきと認識している。ただ、ペンジケントやアフラシャブなどのように、発掘調査の弊害が目立つまで調査が継続的・集中的に行われている遺跡が存在する反面、たとえわずかなトレンチであっても、多くの歴史的事実が明らかにされる可能性を持つ「遺跡地」が全く顧みられていない現実に対して、何がしかの疑問を覚えるのである。日本では、「本当にそこまで発掘調査が必要であるのか」と言う議論さえ発生している。世界レベルでこの体制が確立されるべきだと言う過激で極論的な議論を行うものではない。ただ、「3日もあれば…」と言う悔しい思いが強かっただけである。

今、フェルガナ地域では日本隊が発掘調査を開始している。言うまでもなく、ペンジケントやアフラシャブなどの系譜に位置する発掘調査である。もちろん、遺跡のアフターケアについては万全の調査で、ペンジケントなどのように結果として遺構を破壊することのない調査であると信じている。しかし、ウズベキスタンの現状を考えた時、学問的な興味のみで大規模な発掘調査を実施することが、はたして正しい選択であったか、その議論は尽くされていないように感じる。大規模発掘調査後の遺構の荒廃や市街地における開発の進行など、現実問題を考慮して発掘調査が計画されたのか。関係者に対して失礼な言い方ではあるが、発掘の必要性が説かれたときも、一部マスコミと大発見主義考古学者のエゴが見え隠れしたような気がしている。

発掘遺跡の選択に当たって、例えば、都市部の開発予定地などを考える余地は存在しなかったのだろうか。そうした中から、ウズベキスタンの現状に促した行政的な発掘調査体制を議論することも重要である。あるいは、過去に調査された遺跡の再調査と遺構への保存処理の実施、これらも大きな成果を生み出すものである。別の視点からみれば、本当の「トルキスタンの歴史見直し運動」に寄与する、草の根的な遺跡研究の方法を模索することも、歴史学と言う視点からも評価されよう。必ずしも優れた事例とは言い難いが、ペルーのシカン遺跡調査の顛末

などは、「地元」に根差した歴史観の形成に海外からの発掘調査隊が果たす役割を考える上で、興味深い事例も存在する。

日本国内においては、現状の発掘調査（行政・学術を問わず）が、必ずしも文化財としての行政の確立や地元の歴史観の形成に寄与していないと反省している。この反省から、言わば「若いウズベキスタン国家」にとって、本当に必要で不可欠な発掘調査の方法を模索し、協力していくことこそが求められているのではと感じている。少なくとも、考古学の大発見主義の時代は終わったはずである。

#### 現代的視点から（まとめとして）

イスラームの国はアザーンの声で始まる。今では拡声器によるアザーンも多いが、それでも、ムスリムでない旅行者にも、そこはかたない旅情を感じさせる。ウズベキスタンはイスラームの国である。しかし今回の旅行では、一回だけかすかなアザーンの声を聞いたに留まる。モスクやメドレセばかり見学していたにもかかわらず。

これには、幾つかの原因が存在する。ウズベキスタンの町々が予想以上に都市化していた事実。旧ソビエト時代に宗教が否定され、そうした風習が下火になっていた（決して信仰は下火ではない）事実。そして何よりも、多くの歴史的モスク・メドレセが本来の機能で使用されていないと事実起因している。旧ソビエト時代に宗教が弾圧され、独立後も文化財である点が強調され、モスク・メドレセの使用が制限されていったのである。見学したのはモスクやメドレセではなく、文化財・歴史的建造物であり、

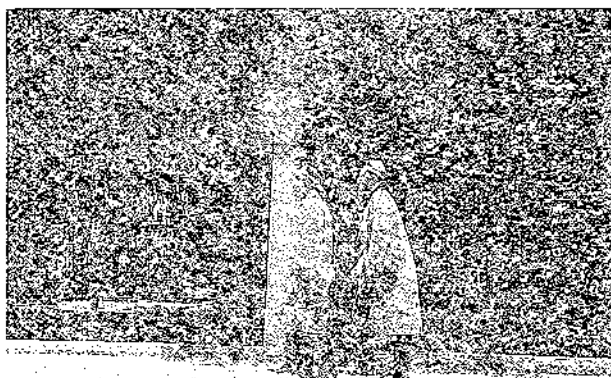


図4 伝統的な姿でモスクへ向う人々

それ以外の使用はなされないのである。

モスクは最も信仰の場らしくなく、かつ、最も信仰の場らしい建造物である。偶像崇拝の禁止は、モスク内部をなんとなく殺風景とを感じる空間とし、一方、アラビヤ文様・光調・音響などの諸要素が、計算された効果・荘厳な信仰性を感じさせる。もちろん、その中では敬虔な祈りが行われる。私たちは、こうした全てを通して、イスラームと言う文明の一つの姿を認識する。日本の仏教寺院とは全く異なる祈りの場と祈りのスタイル。一方「救い」と言うものへのイメージやこれを求める心は、文明を超えて共通することを再確認するのである。

今回の旅行の中でアザーンの声が聞こえなかったと言う事実は、こうした意味からイスラームと言う文明を感じるができなかったとも言いかえられる。文化財であるがゆえに、文化・文明を体感できなかったのである。文化財とは文化・文明を体感するために道具であるにも関わらず。そして、これは我々他者のみならず、ウズベキスタンの人々にとっても大きな問題を投げかけているのである。

すなわち、ウズベキスタンにおいては、伝統的なモスクで祈りを捧げると言う行為が、不可能である事実を意味している。伝統的な場所で、伝統的な宗教活動を行うことは、単純に保守的・宗教的と言う意味ではなく、自らの歴史性を確認し、アイデンティティーを形成・体感するための貴重な行為の一端である。まさに、文化・文化財の根本に関わる問題であり、「無形文化財」と言う意義もここに存在する。従って、ウズベキスタンにおいては、宗教の自由が保障されているとは言え、文化的・伝統的な中での宗教性（＝文化性）については制限が加えられているのである。

文化財としての場を保護するために、その本来の使用を制限する。これは確かに正しい選択肢かもしれないし、その必要性は認識できる。しかし、使用を制限することによって、文化財の本質が阻害されるのも事実である。両者のバランスは非常に難しい問題ではあるが、決して二者択一の問題ではない。問題とすべきは、どちらを選択したかではなく、なぜその選択をしたか、選択の背後に存在する意思の問題である。「本当に遺跡の保護だけを考えて制限

しているのか。」このように言い換えてもいいだろう。ウズベキスタンの場合は、遺跡の保護よりもむしろ「文化行為＝宗教行為」の制限と言う側面が強いように感じたのである。そしてこの考えは、今まで考えてきた整備の問題、発掘調査の問題にも、一連のものとして関係している。

シルクロードは、古代・中世に栄えた過去の交通遺跡群ではない。歴史の郷愁を感じる交通路でも、ましてやロマンにあふれる地の別称でもない。むしろ21世紀に向かって重要性が注目される、いわば同時代史的存在である。カザフスタン・トルクメニスタンを中心とする中央アジア地域は、中東・ペルシャ湾岸に継ぐ地下埋蔵資源の宝庫であり、東アジアから南アジアにかけての経済成長の中でその存在は大きく注目されている。そして、中央アジアの地下資源を世界流通に組み込むためには、まさにシルクロードを西に向かうか、東に向かうか、その輸送路・パイプラインルートは、シルクロードと一致する。旧ソビエトが独占的に保有するとも考えられていたその地下資源は、ソビエト崩壊によって、アメリカ（＝ヨーロッパ）・ロシア・中国・イランなどの大国が巨大な利益をめぐる、各種の介入を試みるようになってきた。シルクロードと呼ばれる地域、すなわちペルシャ湾岸・アゼルバイジャン・アフガニスタン・新疆、これらの地での紛争や混乱は、まさにこの利権を巡るものとしての側面から分析される必要が存在するのである。

そうした現実の中で、中央アジア諸国はどのように自己を確立させ、どのような選択を行うのか、まさに大きな歴史の転換期に位置している。しかも、これは国民国家としての地位の確立とともに、旧ソビエト時代の民族政策に起因する国境の正当性の問題とも直結し、さらに、欧米諸国と何かと「衝突」するイスラーム文明圏としての自己の表現でもある。

ウズベキスタンにおける現政治体制の方向性は、ロシアとアメリカに一定の距離を保つこととイスラーム原理主義への警戒を主軸にした、「世俗国家」の形成に向かっている。大国への一定の距離を保つ政策は、旧ロシアや旧ソビエト時代の歴史的体験に基づく選択肢であり、「イスラーム原理主義」への警戒は、現時点におけるその孤立性を見据えた選択で

ある。この意味からは、極めて穏当で現実的な政策決定と認識できる。しかしこの現実には、宗教の自由が保障され、1000を超えるモスクが活動を再開し、国家統合原理の一つとして「イスラーム」が存在すると言う微妙な関係の上に成立している。フェルガナ地域を中心とする農村部や、都市における経済格差の拡大を基盤として成立してきた「イスラーム宗教政党」の活動には制限を加えている事実は注視しておく必要がある。隣国タジキスタンにおいては「ワッハブ派」による政治活動から内戦状態になり、今年も日本人を巻き込んだ不幸な事件が発生している。ましてや、アフガニスタンの現実と言うまでもない。そうした隣国における現実にウズベキスタン政府は強い危機感を持っているのである。

さて、このロシア・アメリカと言った大国に対峙し、しかもイスラーム原理主義を警戒するという国家の方向性は、チムールの復権とイスラーム教の一種の抑制という、ウズベキスタンの遺跡から感じた方向性と一致する。チムールと言うまさに「世界に通用する英雄」をイデオロギーの中心に置くことによって、ロシア・アメリカと対等の歴史意識の形成を目指す。チムールとは関係ないが、ペンジケントやアフラシャブなどの大規模発掘調査の継続も、「滅んだ先住民は良い先住民」的発想に位置する、地域意識の高揚に他ならない。その一方で、チムール時代に建築された歴史的・伝統的モスクでの礼拝は実施されず、足元の遺跡・歴史には注意を向けない。伝統的「イスラーム」に属する自己を体感することを禁止し、本来的な地域の歴史も黙殺しているのである。これは、過度の「イスラーム」化（＝原理主義）や「民族意識」の高揚を避けているとも理解できる。この二つのバランスこそが、ウズベキスタンの政治的スタンスを如実に表現している。国民のシンボルとしての単純な「チムール」ではなく、まさに巨大な政治的スタンスとして、国家の方向性と合致しているものと認識されるのである。

繰り返し述べておくが、今はこの方向性の是非を問題とするものではない。文化（財）・歴史と言う存在が、一定の方向性だけに強調され、活用される、このアンバランスについて問題を投げかけているのである。この中から、新しい歴史学の在り方を思考

してみたいと考えているのである。ウズベキスタンの政治的な方向性は穏当なものとして理解している。ましてや、中央アジアにおいては、現代的な要請が強く、自己アイデンティティーの形成が急務となっている。この方向性を維持するために歴史が強調され、「規制」が課せられることもあり得ることかもしれない。しかし、地域が世界の中で自己を確立させる行為は、現在における世界の政情とともに、文明として自らの歩んできた道のりを総合的に判断することによってのみ達成されるはずである。言い換えれば、多様性の中での自己を時間軸において整理する中から、現在と未来が見据えられるのである。これは、常に検討・検証されながら繰り返し進められるべき不断の営みである。そして、この行為の基礎になるのが、一つ一つの歴史の多様性を積み重ねることに他ならない。その意味から、現状を批判し、問題を指摘することが歴史ではない。現状でさえも対象として分析し、多様性の積み重ねにすることこそが歴史学であると考えている。ウズベキスタンの遺跡は、まさにウズベキスタンの今日の状況表現していた。敢えて、そこに問題を見出すとすれば、歴史・文化・遺跡が必ずしも開かれた公正な状態に置かれていたものではない現実である<sup>(4)</sup>。この現状を見据えることのみが歴史家にとっての責務であり、これは中央アジアに限らず、あらゆる世界の歴史に通じるべき視点であると信じている。稿を改めて思考を継続したい。

## 註

- (1) ウズベキスタンにおける「歴史見直し運動」については、「帯谷知可 1998「ウズベキスタンにおけるバスマチ運動の見直しとその課題」『地域研究論集』Vol.1 No.2 国立民俗学博物館 地域研究企画交流センター」に詳しい。
- (2) 「ウズベク」と言う概念は、本来中央アジアに居住するトルコ系民族の部族概念に近いものとする。所謂「トルキスタン」あるいは「マー・ワラー・アンナフル」と言う概念による地域の結合を阻止し、分断させることを目的とした旧ソビエト連邦の「民族的境界確定政策」によって、新たに「民族」として成立した概念である。従って、現在のウズベキスタンと言う国民国家も、そのソビエト時代の概念を引き継いだものと言うことができるであろう。「ツェントラーリナヤ・アージャ」構想など、こうした概念に

よる枠組みに抗する政治的な動向も存在するが、文化・経済など所謂「社会総体」としての総括は行われていないの現実である。(小松久男 1997「ソ連邦の解体と中央アジア」『地域のイメージ』地域の世界史2 山川出版社)

- (3) シカン遺跡では、その出土遺物を地元で保管しようとする動き、地元で博物館を建設する動きが日本でも多く報道され、周知されている。ただし、そこでの本質は、その過程でペルー政府は、地元インディオ達の歴史的アイデンティティーが必要以上に形成されることを恐れ、その運動に消極的なスタンスを採ったことである。その対立性の中に隠された南米諸国の持つ本質的な矛盾については論究しないが、遺跡の発掘が、現代的な社会矛盾を浮き彫りにした事実は、極めて興味深い事例である。

- (4) その他の参考文献としては、

- ◎色川大吉 1998『シルクロード遺跡と現代』小学館
- ◎岡田英弘 1992『世界史の誕生』ちくまライブラリー
- ◎林茂雄 1997『イスラムのシルクロード』芙蓉書房出版
- ◎野間英二・中見立夫・堀直・小松久男『内陸アジア』地域からの世界史6 朝日新聞社
- ◎宮田律 1998『イスラム世界と欧米の衝突』NHKブックスなどがある。



## 編集後記

今回は、縄文時代から中世までの論考、および歴史学そのものに関する問いかけを掲載しました。——時は世紀末、新たな一世紀を我々はもうすぐ迎えようとしています。未来と現在を真剣に考え、そのために過去のデータを蓄積していく。それが文化財保護・考古学に携わる我々の責務の一つだと思われます。本号がその一助になるのを願ってやみません。(S)

平成11年3月

### 紀要 第12号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大苅町1732-2  
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668